

B—31 日本における衣服の流れ（形態・構成を中心として）（第2報）

国宝・鶴岡八幡宮の御神宝の装束

星美学園短大 栗原 澄子

1. 今日の日本の衣生活は、日常着・労働着として洋服が多く用いられていますが、私は今もって各国の民族服がそれぞれの国風や民族の体格によく似合っている点から考えても、今後の日本の衣服となるものは、スタイル・染織・構成方法など単なる西欧の模倣ではなく、わが国独特の民族性や体形をより美しく表現し、気候風土・生活様式にもよりマッチしたものが創作されることを切望いたしますので、日本の被服の歴史を調査研究し、最後に今日の洋服と比較して、今後の日本の衣服がいかにあるべきかということの研究してみたいと思います。

2. 日本の被服の歴史と生活環境の流れを顧みながら、各時代毎に遺存するできるだけ多くの実物を取りあげ、その形態・構成を中心として、色相・染織・着装方法など正確に調査し、その衣服が当時の社会の気候・風土・生活様式等にどれだけ適応していたか、その美点・欠点を研究し、社会の変遷にともなって変化していく過程などをしらべて記録し、同時にそれ等一つ一つの形態・縫い方・色相・染織方法をできるだけ正確に復元してみることにしました。

3. 今回は、地質は精巧な、重みも相当あり、文様もなかなか精緻で、色相も神宝にふさわしい気品と優雅、端正さがあり、植物性染料のことなど調査結果を報告し、あとは次回につづきます。